



Think
the future
by myself.

ぼくたちの未来のために。
everblue vol.31 special issue

everblue staff
なりきよ

高校生

class 03

高校生が見た国際会議

COP10で考えた。 ぼくらの地球はどうなるの？

10月、名古屋市で行なわれた第10回生物多様性条約締約国会議、通称COP10。
この国際会議と同時に開催された「子どもCOP」と「生物多様性フェア」では、高校生が活躍していた。
国際会議の大舞台と、そのサイドイベントへの参加。それぞれに持ち帰った“学び”を聞いてみた。

文：成清 陽、新海洋子 Text by A.Narikiyo, Y.Shinkai
写真：成清 陽 Photo by A.Narikiyo 写真協力：愛知県

上川会場で使っていた「ORIGAMI」。COPのロゴにもなっている動物たちを折る。下リブリスに訪れた海外の人と一緒に多くの出会いにも恵まれた



外の現地ボランティア。かつて南アフリカに暮らしていた少女は、そのとき見た光景が心を離れない。「貧困がひどくて……。入院したエイズ患者さんのものが病院で盗られてしまった。そういう状況を改善したいと思っています」自然の問題も、人間の問題も知ることがスタート。彼女のアクションは、まだ始まったばかりだ。

Think the future by myself.

ぼくたちの未来のために。
everblue vol.31 special issue

江端静香

Shizuka Ebata

「自然を守らなきゃ」
と思うけど……
まずはその活動を
知りたい



COP10会場近くの白鳥公園で開催された「生物多様性フェア」。多様なブースが並ぶなか、IUCN（国際自然保護連合）のブースで通訳として活動したのが、有馬くんと同じ南山国際高校2年の江端さん。「ブースに来たケニアの方が、親の寄付金で、子どもひとりにつき1本の本を植えるプロジェクト『a child a tree programme』を教えてくださいました。木と子どもの成長過程をHPに掲載するから、親も地球もうれいですね。仲良くなつてメアドも交換しました。嫁に來いって（笑）」自然を守りたいと思いつつも、その活動をほとんど知らなかったという。フェアで知った砂漠の植林活動には、大学に入ったらぜひ参加したいとのこと。そんな彼女の夢は、海

環境省中部環境パートナーシップオフィス（EPO-CHUBU）チーフプロデューサー、NPO法人ボランティア・ネイパーズ理事。中部地域の市民・NPO・企業・行政などをつなげて、情報提供や広報活動、活動実施まで包括的にサポートしている

COP10で決まったことは？

文：新海洋子 Text by Y.Shinkai

193の締約国、参加者約1万8000人が名古屋市に集まった。主な議題は3つ。新戦略計画（ポスト2010年目標）、遺伝資源の取得と利益配分（以下ABS）、資金動員戦略である。新戦略計画は、2002年にヨハネスブルグ（南アフリカ）の持続可能な開発のための世界サミットで採択された「2010年目標」に代わる、生物多様性を守るための国際目標である。2010年目標が達成できなかったため、新戦略計画は達成可能であることが最大の条件だったが、EUを始めとする先進国の「野心的・意欲的目標」と、アフリカ・南米・アジア各国の「現実的な目標」が対立。数値目標の設定に関して議論が白熱した。結果、2050年に向けて「自然と共生する社会」という長期目標、生物多様性の損失を止め

るために効果的かつ緊急な行動を実施するという、2020年に向けての短期目標を合意。5つの戦略と20の個別目標を定めた「新戦略目標（愛知ターゲット）」が採択された。

ABSの議論では、遺伝資源を得る際の手続きや、生じた利益を提供国と利用国に公平に配分するルール作りが行なわれた。提供国は「適用期間は議定書発効前にもさかのぼること、対象範囲は遺伝資源の派生物も含むこと」、利用国は「適用期間は議定書発効後とすること、対象範囲は派生物を含まないこと」と主張。最終的に、適用期間は議定書発効後、派生物も対象範囲とすること（ただし議定書でアクセスの対象としたのは遺伝資源）、利用者や利用国が他国の国内法もしくは規制を遵守しているかをチェックする仕組みを作ることな

どを定めた「名古屋議定書」が採択された。

資金動員戦略は、その進捗状況を監視する指標と目標が論点だった。採択されたのは、「しっかりとした指標作りなどを条件としてCOP11で目標を採択すること、2020年までに途上国への毎年の国際的資金フローを増加させるという目標を発展させること」と、併せて15の指標を決定した。

深夜に及んだ本会議では、すべてが採択された。だが、大切なのは「今後」だ。私は「地域や市民にこそ変えられる力がある」と思う。暮らしの基盤である海辺、水辺、畑、田んぼ、町をいかに生物多様性豊かにするか、豊かなままに残すか。私たちが食す・使うものがどう作られているかに関心を持つことが重要だ。一市民としての「私」にできることが「地域」にはたくさんあるのだ。



「最初は推薦入試に有利かな〜と思って。今は火がついちゃいました」

気の強そうな表情が緩み、南山国際高校2年生の有馬くんは、えへへと笑う。今までは彼は、生物多様性をテーマとして国内外のユース代表と意見を交わす「生物多様性アジアユース会議in愛知2009」や「生物多様性国際ユース会議in愛知2010」に参加してきた。当初、会議の内容はわからなかったそう。無理もない。環境問題の知識や経験をもとに国内外の若者と話しあい、アクションプランやステートメント（宣言文）を作成するという高度な内容だからだ。

今秋、彼はCOP10と時を同じくして開催された「子どもCOP10あいち・なごや国際子ども環境会議」（以下子どもCOP）で、国内外の小中学生が集う国際会議の総合司会を務めた。『生物資源を持続的に得られるようにするには』『生物が生息している場所をよりよくするために』などの分科会では、通訳もしました。そして、大人へのお願いと、子どもたちができることを成果としてまとめたんですが……」

彼は妥協しておらず、すでに来年のことを考えている。「来年は司会だけじゃなく、すべての運営そのものもぼくらユースに任

有馬佑亮

Yusuke Arima

これからの時代、
ぼくらユース世代が
とても大事だと
思います



COP会場でもらった思い出のタンブラー。地球への想いを乗せた絵の裏には、小学生からのメッセージ「SAVE OUR PLANET」が。さすがの有馬くんも「オレには重過ぎます」



せてほしいです。最低2泊以上して、目標を決めて参加者とスタッフが納得いくまで話しあいたい。今年ではできなかったけど、子どもは大人と違う視点を持っているからこそ意見と意見を大事にして、ステートメントなどの語調にもこだわりたい。会期中、会議場にも足を運んだ彼はCOP10をこう振り返る。「参加国が生物多様性を守ろうっていう同じ船に乗れたのは良かったで

るんです。純粋に生物多様性などのことを考えて意見を出せるから、ぼくらが大事なんだと実感しました」両親があきれられるほど国際環境会議にハマった高校生。その純粋さを、私たち大人も見習いたい。地球を、青く輝かせ続けるために。

COP10 CHECK

左＝会議場内で採択文書案を読み込む有馬くん。語調のチェックなども怠らない。中＝松本龍環境大臣が議長を務めた最終日。文書案を吟味し、各国に異議がないかを確認しながら一段落ずつ採択する。右上＝議論の難航により、たびたび中断された本会議。ギリギリまで各国代表が妥協案を探った。右下＝「森林保全と気候変動に関する閣僚級会合」で共同議長を務める前原誠司外務大臣。議長国の代表として国会から名古屋まで駆けつけた

